陰頽

レヲ迎ヘ給フ、我レ只今永ク此ノ土ヲ去テ、極樂ニ往生シナムトスト云テ、西ニ向テ失ニケリ、此レヲ見ル人涙ヲ流シテ悲ビ貴ビケリ、此ヲ聞ク人亦不貴ザルハ無カリケリ、此レ奇異ノ事也トテ、語リ傳フルヲ聞キ繼テ、此ク語リ傳ヘタルトヤ、

〔小右記〕長和五年正月六日辛亥、召使申、今日叙位議由、申刻許參內、陣座有饗、仍不著、詣左相府直廬、中宮御在所、假爲直廬、諸卿會座出會云、兩府不可被參云々、早可始叙位議者、仍余率諸卿著陣座、大納言道綱卿稱腰病留相府直廬陣、○下略

〔台記〕久安三年五月廿五日丁亥、禪閤、○藤原忠實賜文書九合、陰陽書二合、醫書二合、日本書五合、差置二帖、一帖御即位、一帖大內、御語次、被仰曰、腰疾、自一昨日大漸、入夜見寬平遺誡、

〔增鏡六烟の末々〕明くる年は建長五年なり、正月十三日、御門○後深草かうぶりし給ふ、御年十一、御諱久仁と申す、いとあてにおはしませど、あまりさゝやかにて、又御腰などのあやしく渡らせ給ふぞ、口をしかりける、いはけなかりし御程は、なをいとあさましうおはしましけるを、閑院の內裏燒けるまぎれより、うるはしくたゝせ給ひたりければ、內の燒けたるあさましさは何ならず、この御腰のなをりたるよろこびをのみぞ、上下おぼしける、

〔看聞日記〕應永廿三年八月十九日、昌耆法眼參、自十四五日御所樣御腰痛、起居不叶、自夏比御不食之間、御憔悴無極、舊冬御脚氣再發之由昌耆申、夏以來同阿療治申無効驗、此間高間良藥勾當局進之、是も無其驗、此藥共不相應之由昌耆申、御療治事被仰付了、

〔倭名類聚抄二病〕陰頽　針灸經云、治陰頽方、頽音杜回反、一名下重、俗云曾比、令莖頭下向陰囊縫、當頭所著處、灸其縫上七壯、卽有驗矣、

〔箋注倭名類聚抄二病〕戶令、下重爲殘疾、義解、謂陰頽也、陰極脹腫、得陰卽發、卽大如升、沈重難行、故曰下重也、新撰字鏡賨同訓、谷川氏曰、疑是添之義、万安方訓曾比布具利、今俗呼或爾、○中略　按千金方